

2 学期終業式

校長 栃倉 和則

サッカーワールドカップの興奮も未だ冷めやらず、余韻に浸っている人も、睡眠不足が続いた人も多かったのかもしれない。残念ながら、日本は念願のベスト 8 進出に一步届かなかったが、本当にワクワクさせてくれた。しかし、昔の、昔と言っても本当に昔、50 年ほど前、日本がドイツやスペインに勝つなどと、誰が予想しただろうか。私が小中学生のころ、J リーグなんて、まだ影も形もなく、プロスポーツと言えば野球とプロレスくらいしかなかった。今日は、勝負の話です。

「醜く勝つなら美しく負けたほうがいい」オランダの名サッカー選手（後に FC バルセロナ監督）、ヨハン・クライフの言葉とされる。「そんな言葉を言い訳にするな」と言ったのは、岡田武史監督だった。前回のワールドカップの頃です。こんなことを言っているから日本はいつまでも強くならないと言っていた。

私は、クライフがこの言葉を発言したということに強く違和感を持った。彼ほど一点を取ることにこだわった選手はいなかったし、勝つことに執着した人だったからだ。真意が知りたくて、いろいろと調べてみたが、見つからない。もともと勝負ごとに弱い日本人の感性に響いただけなのかもしれない。

美しく負けるとは、華麗なプレーをして負けるということだろうか？と考えた。そんなことしたら、ただのバカだよななどと思ったわけです。カッコつけて負けたら、それこそ、カッコ悪いじゃないですか。

醜く勝つとは？美しく負けるとは？一般的な解釈では、美しく＝華麗、醜く＝格好悪くなどという言葉が思い浮かびますが、さきの理由でちょっと違うと思ったわけです。そこで本を読んだり、ネットで調べてみたのです。

調べてみてひとつだけわかったのは、この言葉が試合に負けたときに発せられたらしいということ。つまり、「負けたけれど、美しかった」ということが言いたかったのだらうと思います。

言葉には必ず

発せられた背景や文脈、そして

どんな意味を持たせようと言っているのか、すなわち定義が重要であるということを感じておいてください。言葉だけが独り歩きをすると、誤解が生じます。そんな意味で言ったつもりはない、拳句の果てに「記憶にありません」などとごまかされてしまうことも。

彼の他の言葉から推測すると、「美しく」は「攻撃的に」、「醜く」は「守りに徹する」

という意味だとわかります。

やはりここでは、「美しく」と言っても、華麗なプレーを意味したのではない。「勝っていたとして、そのまま守りに徹して勝ったとしても、それは美しくない。勝っていてもさらに攻撃を続けなければ意味がない。その結果負けても攻撃的に頑張ったんだから、仕方がない」という意味であって、負けたことの言い訳ではなかったようだ。文脈と定義、覚えておいてください。

さて本来、試合を意味する game は、ルールの下での勝負事を意味したと言われています。後に、play games の play の意味を帯びようになり、遊びやエンターテインメントの意味合いを含むようになったと考えられています。

普通、ボードゲームやテレビゲームの意味は後からだったのですね。

他に、試合、競技を表す

かけ引きや策略

そして、狩猟、あるいは猟の対象となる獲物を意味することがある。まさに命懸けだ。じれは受験生なら知らなければなりません。

生涯スポーツと言われて久しいですが、健康づくりや体力維持のために、身近な生活の場にスポーツを取り入れていく生涯スポーツとは、競技を同じくすることはあっても全く別物と考えた方がよさそうです。競技はあくまでも勝負ごとです。勝つことを目標とします。

リスペクトプロジェクトをご存じだろうか。もともとはサッカーのムーブメント。自分を取り巻く、人や環境のすべてをリスペクトした上で、常に全力を尽くしてプレーすることがフェアプレーの原点であるということです。

- ・チームメート、対戦相手、審判、先輩後輩、マネージャー、家族、自分と関わりのある人々に対してリスペクトしよう。
- ・激しいプレーでボールを奪い合う場合でも、相手を侮辱してはいけない。
- ・試合に出られないチームメートの分まで走らなければいけない。
- ・自分一人ではスポーツを続けられない、と知らなければいけない。
- ・「観客」はいなくても、見ている人は必ずいる。常に全力を尽くさなければいけない。

競技は勝つことを目的としている。ルールの中で勝つことを競う。ルールは競技者にとって、絶対の存在。ルールがあるからこそ、勝利が価値あるものとなる。ルールがある世界では、遠慮は無用。こんなことしたら、嫌われちゃうかな…などと考えていたら…負ける。手加減をすることは相手を侮辱することである。

そして、勝つということは、相手に勝つ前に、自分に勝つということ。ルールの下での勝敗であるにも関わらず、うまくいかないことで感情的になってしまうというのでは、自分に負けているということである。判定に対して、審判に食って掛かるのも全く同じ。自分を制御すること。すなわち、自律。

余計なことは考えず、相手をリスペクトし、自己のベストを尽くすのみ。ハングリーに勝ちにこだわって、言い訳をすることなく、一途にプレーする。そのことが競技の質を高めるのだし、勝利に価値がある。そして、だからこそ、負けても美しいのだと思う。

以前、先輩の教員から聞いた言葉を思い出した。その先輩は 1972 年の甲子園に春夏出場、春の選抜では優勝を飾り、夏の甲子園では強豪校に敗退したチームのキャプテンだった。公式戦 22 戦のうち、19 勝 2 敗 1 分けという恐るべき勝率のキャプテンが言った言葉。

「トッチーよ～。試合はさ、残酷なもので、どんなチームだって、すべて勝つわけにはいかないんだ。いつか負ける。だから負け方が大事なんだ。どんなふうにも負けるかでそのチームの価値が決まるんだよ。」…クライフの「美しく負ける」と共通しているような気がした。

三年生は受験本番。自分に勝って、大きな成功を収めてほしいと願っている。

Touch the Sky! TOYOTAMA!